



2007年4月1日

通巻1058号

発行：金沢大学教職員組合執行委員会  
〒920-1192 金沢市角間町  
TEL076-262-6009 角間内線2105  
E-MAIL kanazawa@ku-union.org



## 金沢大学版 地球の歩き方

### 《ドイツなのにイタリア? 世界遺産の街 Regensburg》

志村 恵 (文学部)

金沢大学はドイツの二つの大学と交流協定を持っています。一つは、ケルンの近くにあるジーゲン大学、もうひとつはドナウ河のほとりにあるレーゲンスブルク大学です。今回は、そのレーゲンスブルクを紹介したいと思います。法学部や経済学部、あるいは理学部には僕よりもこの街に詳しい方が何人もいらっしゃいます。でも、過去3回語学研修に学生を引率し、その経験を通じてすっかりこの街が好きになりましたので、『ゆにゆに』で紹介させていただきたいと思います。

レーゲンスブルクは、2006年4月に世界文化遺産に登録された古都です。しかし、この情緒豊かな街も日本では残念ながらまだあまり知られていません。ただ、昨年一瞬ですが、日本のメディアにも大々的に取り上げられました。それは現ローマ教皇ヴェネディクト16世がまさにこの街で(大学の講堂です)後にイスラム世界の反発を買うことになる例の講演を行ったからです。実は、教皇は本名をラツィンガーといい、教義担当の枢機卿になる前にレーゲンスブルク大学でカトリック神学部の教授を務めていました。また、実兄のゲオルク・ラツィンガー(彼出演のラジオのインタビュー番組を聴いたことがあるのですが、この人はとってもいい人です)はかつて大聖堂付属合唱団「ドーム・シュバッツェン」の指揮者だった人で、今も同地に住んでいます。そうしたこともあり、就任後初めてのドイツ訪問の旅でヴェネディクトはレーゲンスブルクを訪れたのでした。ちなみに、僕は昨年この教皇の故郷訪問の最中にレーゲンスブルクに滞在していましたので、防弾ガラスで囲まれた教皇専用防弾車、通称「パパ・モビル」を間近で見ることができました。祝賀記念ミサに出ることも可能だったのですが、彼の神学的な立場があまり好きではないので、見るのは「パパ・モビル」だけにしておきました。



塔のある建物

さて、レーゲンスブルクの歴史は古く、紀元前4世紀には人が住み始めた跡があります。ローマ時代には本格的に歴史に登場し、カストラ・レギーナという駐屯地になります。8世紀には聖ボニファティウスのキリスト教化の洗礼を受け、



大聖堂



国会が開かれた旧市役所

その後司教区が形成されました。12世紀には神聖ローマ帝国の国会が開かれ、文字通りヨーロッパの中心となります。ドナウ河の水運を背景とした地理的な条件に恵まれ、レーゲンスブルクは富を蓄積し、中世後期、繁栄を極めます。その時代、豪商たちが競って塔を建てたため、現在でも多くの塔が聳え立ち、街の風貌にアクセントを与えています。ドイツながら、最北のイタリア都市と呼ばれているのは、東西南北の交易路に位置したこの街の都市機能のゆえです。第二次世界大戦で大きな被害を受けなかったため、中世都市の姿がそのまま残っています。しかもそれを生かして住居や商店などに活用しているので、単なるテーマパーク的な観光スポットとは違ったヴィヴィッドな体験をすることができるのが、この街の最大の魅力です。夜遅くまで人々が旧市街にとどまって、レストランや居酒屋でくつろぐ、いつまでも眠るのが惜しくなる街です。

皆さん気になるレーゲンスブルクの名物ですが、いかにも南ドイツらしく、ビールとソーセージです。街には、何と世界最古といわれるソーセージ屋があり、観光客と地元の人たちに愛されています。このソーセージ屋の由来は12世紀にまで遡るとされ、当時石造りの橋を建築する作業員のための飯場だったとのことです。供されるのは小ぶりの焼きソーセージで、好みによって甘めのマスタードか中辛のマスタードを塗って食べます。小さな石造りの小屋の中でジュウジュウと一日中ソーセージを焼き続けています。小屋の外には机と椅子が沢山並べられており、夏には大勢の人でにぎわいます。いつ行っても満席なので、近くでじっと様子を伺い、椅子が空いたらすばやくお尻を割り込まなくてはなりません。まるで、椅子取りゲームです。冬には狭い小屋にもぐりこんで、地元の人たちと肩を並べながらメガネを曇らせながらフーハー言いながらソーセージを齧ります。旨いです。(写真はバイエルン全体の名物である白ソーセージ)

ビールの方は、エチゴビールの上原誠一郎さんが『ビールを愉しむ』(ちくま新書)で詳しく紹介していますが、ドイツビールの真髄を極めるようなコクと苦味と爽やかさの調和の取れた大人のビールが味わえます。銘柄としては、地元民に愛されている直営店が有名なクナイティンガー、昔は郵便業を営んでいた貴族が経営するトゥルン・タクシス、それと大聖堂横の旧司教館の名前を冠したビショフスホーフなどがあります。ミュンヘンほどではないですが、レーゲンスブルクにもピアガーデンが沢山あります。石橋と大聖堂を遠望できるピアガーデンで飲む地ビールは格別です。

レーゲンスブルクも最近では、ようやく日本の旅行ツアーに組み込まれてきたようです。以前は留学生と企業の駐在員以外ほとんど日本人を見ませんでしたが、昨夏は何団体かのツアー参加者を見ました。皆さんも行きやすくなったレーゲンスブルクでバイエルン料理を楽しんでみませんか？



バイエルン名物白ソーセージ



ピアガーデン



ロココ風教会



ドナウ河クルーズ



## それでもボクはやっていない

監督：周防 正行 2007年日本映画

出演：加瀬亮、瀬戸朝香、山本耕史、もたいまさこ、役所広司 他

(写真：) 映画生活 <http://www.eigaseikatu.com/title/16623> より転載

橋 洋平（情報部）

国民的大ヒット映画「Shall weダンス？」以来、本当に久しぶりに作られた周防正行監督による新作映画。

周防作品は、まず「何を描くか？」というテーマがポイントである。これまで、社交ダンス、相撲、僧侶……といったマイナーな題材をユーモアと温かい視線を交えたタッチで描いてきたが、今回の「それでもボクはやっていない」は、痴漢冤罪裁判という難しいテーマに真正面から取り組んだものだった。意外性という点では、従来の周防作品と共通するが、「Shall weダンス？」の世界と決別したのは大きな冒険だった。



しかしその冒険は成功だった。展開がシンプルで分かりやすいこともあり、周防監督の主張がストレートに伝わってくる、まれに見る力作としか言いようのない完成された作品に仕上がっていった。

この作品の主眼は、「検察が起訴した事件の有罪率が非常に高い」という事実に潜む矛盾をリアルに描く点にあった。その一例が痴漢冤罪問題である。実際に痴漢を行った人が犯罪を認めた場合は交通違反のみの罰金を払えばその日のうちに釈放されてしまうのに対し、やっていないのに一度痴漢の容疑者に間違われてしまった人の場合、「絶対やっていない」と主張してもほとんど勝ち目はない。

これは、超満員電車という犯人が判別しにくい状況が日常的に発生している点に根本的な問題がある。被害者が悪いわけではないのだが、犯人に間違われてしまった人にも責任はない。この裁判制度の矛盾に対する怒りがリアルに描かれている。2時間を超える作品だが、緊張感が緩むことなく、畳み掛けるようにストーリーが進む。無罪なのに巻き込まれてしまった「どうしようもなさ」に一瞬も目を離すことができなくなる。

その素晴らしさは、周到に作られたシナリオにあるが、それを生きたものにしている俳優の演技も見事である。主演の加瀬亮、その母のもたいまさこ、親友の山本耕史、主任弁護士の役所広司、若い弁護士の瀬戸朝香という被告側が次第にチームのような団結力をを見せ始める。この「チームの団結」というのは、これまでの周防作品に共通するムードである。検察側、裁判官も派手過ぎない役者を揃え、リアルな雰囲気を伝えている。途中で担当裁判官が変更になるが、そのキャラクターの描き分けも見事である。裁判官の解釈次第で、結果が正反対になる怖さが伝わってきた。

裁判の結末は書かないが、制度の矛盾を強く印象付ける内容となっていた。ふとした手違いから、国家権力に対して、長く厳しい戦いを強いられてしまった主人公ではあるが、その回りに支援の輪が広がって行く様子は、ある意味で恵まれている。その戦いぶりを情にだけ訴えるのではなく、一種「裁判戦法マニュアル」



的な雰囲気で表現しているのも周防監督らしい。裁判制度に関心を持っていない人にも興味が持てる内容になっていた。

厳しい裁判をリアルに描いた作品ということで、本来、見るのが辛くなりそうな映画ではあるのだが、このような映画作りの巧さもあって、全体のトーンは暗過ぎることはない。作り手の思いが強過ぎて、「言いたいことは分かるが……2度と見たくない」という映画もあるが、この作品は、思いが伝わると同時に「作品の結末を早く知りたい」という映画的な魅力にも満ちていた。私自身、もう一度観てみたいと思った。観る前以上に観たくなった。さすが周防監督と思わせる作品だった。

あすきの♪

# ちょっといいは店

カレー屋「Siesta」

松平 拓也

(総合メディア基盤センター)

角間方面から山側環状線の四十万北交差点を右折するとすぐに目にすることができるおしゃれな外観のお店。イタリアンでもフレンチでもなくカレー屋「Siesta」です。Siestaとはスペイン語で「お昼寝」のこと。



確かにその名のとおり店内は白を基調とし、アットホームな感じでとても落ち着ける雰囲気です。今回はランチに訪れたのですが、郊外にあるにもかかわらず、駐車場はほぼいっぱい大人気でした。

Siestaのスタンダードカレーは、ポーク・チキン・シーフード・野菜の4種類があります。そして、Siestaではセットを注文することをオススメします。セットにはサラダ、ドリンク、手作りデザートがつきます(セットは土日祝もOKです)。今回、私はポークカレーセットを注文しました。カレーのスタイルはじっくり炒め、じっくり煮込んだ欧風カレータイプで、スパイスも効いていて、程よい辛さとまろやかさを兼ね備えた“新感覚”的なカレーです。そして、手作りデザートはティラミスでした。カレーを食べた後のデザートも格別です。

お店の雰囲気とカレーのスタイルがこれまでのカレーの概念を変えてくれます。

突然の取材にもかかわらず、シェフをはじめ、スタッフの皆さん快く応じてくださり本当にいいお店でした。おしゃれにカレーを食べてみたい方は是非一度食べに行ってみてください。



住所：金沢市四十万町北ワ43-3 TEL: 076-296-1316

営業時間：11:30～21:30(L.O. 21:00) 定休日：月曜(祝日は営業) 駐車場：10台

## ○○○編集後記○○○

今期2号目のゆにゆにをお届けします。レーベンスブルクはその昔「オルフェウスの窓」という少女マンガの舞台として名前を覚えた町でしたが、現ローマ教皇との意外な繋がり、歴史や名物の紹介など興味深く読ませていただきました。「それでもボクはやっていない」は、題材がやや重く地味に感じられたため二の足を踏んでいましたが、必ず観たいと思います。「Siesta」は私も好きなお店です。お薦めします！

最後になりましたが、素敵な文章を寄せて下さった執筆者のみなさまに感謝いたします。(編集者/K)